

よろずは

平成二十七年
十一月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

万葉歌と季節の植物1

我が衣色つけ染めむ味酒三室の山は黄葉しにけり

(巻七・一〇九四／柿本人麻呂歌集)

私の衣に色をつけて染めよう。味酒の三室の山は黄葉していることだ。

紅葉の季節を迎えて、もみじ狩りに出かける方も多いのではないだろうか。万葉人たちは秋の季節が大好きで、秋の草花や色付く葉を愛でる歌をたくさん詠んでいます。

この歌には「味酒三室の山」とあり、これは桜井の三輪山を指していると考えられます。三輪山の色とりどりのもみじを自分の衣に染めて、美しい衣にしたい——それほど、三輪山のもみじが美しいことをうたっているのです。

ところで、『万葉集』ではもみじのことを「もみち」と言い、「黄葉」と書きます。これは、中国六朝詩（3〜6世紀頃の中国で詠まれた詩）に、色付く葉を「黄葉」と表記していたことを受けて、当時の日本でもこの表記が使われるようになりました。当時の貴族や官人たちは中国の文学をよく学んでおり、その一端がこの「黄葉」の言葉にあらわれています。

また、『万葉集』の「黄」という色は、イエローのみを指すのではなく、赤や橙色なども含めた暖色系の色を広く指します。万葉人たちは、一体どんな「黄葉」を見ていたのでしょうか。



【黄葉・もみち】
イロハモミジ (上)
ヤマモミジ (下)



【万葉古代学係】

※今号からはじまるシリーズ「万葉歌と季節の植物」では、万葉文化館の万葉庭園にある植物を中心に、季節の万葉歌をご紹介します。